ズブズブ班

ラオス・ビエンチャン特別市およびその近郊における人間と犬の関係に関する予備調査

宮村春菜

キーワード：犬、関係性、狂犬病
調査期間･場所：2003 年 12 月 7 日～ 10 日、2004 年 3 月 27 日～ 29 日、ビエンチャンおよびその近郊

A Pilot Survey on the Relationships between Humans and Dogs around Vientiane.

Haruna MIYAMURA

Keywords: Dog, Relation, Rabies.
Research Period and Site: 2003, December 7-10. 2004, March 27-29. Around Vientiane.

要旨：本研究は，ラオスの人々の生活における飼育動物のありかたを人間－犬関係から明らかにすることを目的とする。予備調査では，犬の飼育実態を調べ，そこから，噛むことと病気，犬の取引，食用としての犬について知見を得た。今後，飼い犬に求める役割，犬取引ネットワーク，噛むことと病気に対する意識の３点について調査を行い，犬と人間がどのような関係を築いているか、また、人びとは犬に対してどのような見方をしているのか、犬の存在が人間に直接的もしくは間接的にどのような影響を及ぼしているのかということを究明していく。

1. 予備調査の目的

人間は日常生活で多くの動物と係わり合いを持って暮らしている。そしてその動物を通じて人間はさまざまなものを見、感じ、動物の影響を受け、また動物に影響を及ぼし生活していると考えることができる。

とりわけ犬は、人間と古くからかかわりを持ち、かつ、多様な関係を築いている一般的に馴染み深い動物の 1 つである。しかしながら、人と犬との関わりに関する従来の研究は、日本や欧米諸国において犬が人間にもたらす有用性から一面を強調するようなものが数多く、上記以外の多くの国々での日常的なかかわりについては、ほとんど取り上げられることはなかった。特に東南アジア諸国において犬は集落に必ずといっていいほど存在するにもかかわらず、その関係性については、管見の限りほとんど明らかにされていない。そこで私はラオス・ビエンチャン特別市およびその近郊において、犬と人間がどのような関係を築いているか、また、人びとは犬に対してどのような見方をしているのか、犬の存在が人間に直接的もしくは間接的にどのような影響を及ぼしているのかということを明らかにすべく、人間と犬の関係に関する予備調査を行なった。調査は主に現地在住のラオス人への聞き取り、および現地での直接観察によるものである。

2. 予備調査結果

1］犬の飼育実態

ビエンチャン特別市およびその近郊の村々において、大部分の犬はつながれておらず、飼い主の家の敷地内およびその近くを自由に動き回ることができる（写真 1,2)。また、ビエンチャン特別市内においては、つながれて飼育されている犬もごくわずかであるが見受けられた（写真 3)。これら一部の、つながれて飼育されている犬は、珍しい犬種、人懐っこい犬であるため誰かに持ち去られることを恐れて飼い主が繋いだとのことであった。また年をとって目が悪くなったためつながれている犬も 1 匹見受けられた。

ほとんどの犬は飼い犬であり、ノラ犬は基本的には存在しない。飼い主のもとから逃げてしまったり、飼い主のもとを離れ戻れなくなってしまったりする犬も存在するが、別のところで飼い犬になっていることもあるという。飼い主のもとに戻れなくなってしまう理由としては、盗まれる、事故にあう、雄犬であれば繁殖期、雌犬

を追って迷ってしまう、といったことが一般的に考えられるようである。

たいていの犬は飼い主の家の敷地内およびその周辺をうろついているが、基本的には玄関より中に入れられることはなく外で生活をしている（写真 4）。また犬小屋は存在せず、夜間は家を守らせるため犬は外で寝かされている。

犬はビエンチャン特別市においても、その近郊の村々においても、番犬として飼育されていた。また飼い主によっては「飼うのが好きだから」という理由も付加されていた。番犬としての役割は、敷地内に人が入ってきたら吠えるというもので、不審人物に噛み付くことはないという。すなわち番犬としての犬に求める役は、「警報者」であり、「攻撃者」ではないということが推察される。

ビエンチャン近郊のポンガム村の住人の話によると、飼っている鶏や所有しているバイクを盗む泥棒よけに飼育しているとのことであった。また、Nōnté 村では出荷用の栽培野菜、鶏、牛を盗む人を追い払うために飼育していた。このように、犬を飼育する目的はほとんどが番犬であったが、守るものについては人びとの生活スタイルや生業と結びついてさまざまであると考えることができる。

また、1 世帯が飼育する犬の数であるが、犬の登録制度が確立されていないため実数は把握できないものの、ラオス国立大学の学生（30 歳、女性）の話では彼女は 4 匹の犬を飼っているが、一般的なラオスの犬飼育数に比べるとそれほど多くない数であるという。また Nōnté 村の女性の話によると、村では各世帯平均 2 頭くらいの犬がいるが、その数についてあまり多くないと語っていた。また Nongnō 村在住の女性によると、村では 1 世帯あたり 4 ～ 5 頭の犬を飼っているということであった。以上のことから、犬飼育頭数は地域によってさまざまであるものの、1 世帯あたり複数頭所有している場合が多いことが示唆された。

2］噛むことと病気

以上に示したように犬は番犬として人びとの家や財産を守る役目を果たしている。しかしながらそれはあくまで吠えて怪しい人を追い払うということで、自分の犬や、自分以外の人が所有する村の犬が噛みつくなどといった人に危害を与える行動については、ポンガム村でも Nongnō 村でも、ないとのことであった。一方で暑季には暴れたり、木などあたりのものに噛みついたりする病気になる犬がいるという（ポンガム村）。また、季節を問わず、犬が罹るある病気があり、その病に侵された犬に噛まれた子どもは死んでしまうという話も聞かれた（Nongnō 村）。これらの病気が日本語でどのような病名をさすのかという点については、まだ明らかにしておらず、今後の調査により解明する必要があるが、これらの村の住人は自分の犬、もしくは自分の住む村で飼育されている犬は噛まないと認識している一方で犬が何かを噛む衝動に駆られるもしくは噛むことによって人間にうつるのではないかと考えられる病気の存在も認識しているという相反する事実が示された。また、ビエンチャン特別市在住の男性も人を噛む犬はほとんどいないと答えている。

犬がもたらすもっとも深刻な病気に狂犬病があげられよう。ビエンチャン市内の女性医師の話によると、ラオス国内でも 1 年に十数名の患者が出ているとの報告がある（報告書未確認）が、未報告、不明分を加えるともっと多くなる可能性があるようであった。なお、ビエンチャン特別市内に動物病院ができたのは 5 ～ 6 年ほど前のことで、犬を病院に連れて行くこと自体ラオス人にとっては馴染み深いものではないとのことであった。

3］犬の取引

犬を飼育する際、入手方法は子犬が生まれた家から譲り受けるのが一般的である。ビエンチャン特別市在住の男性の話によると、もともとラオスでは、金銭を介して犬を取引する習慣はないということであった。そして犬を売ると縁起が悪いとさえ言われている。その理由としては命を売買するのはよくないことであるという仏教的思想が背景にあり、売る側に抵抗があるとのことであった。しかしながら最近になってビエンチャン市内にペットショップができている。市内のあるペットショップのベトナム系ラオス人のオーナー（27 歳、男性）によると、店をはじめたのは 8 年前で、犬は客の注文を受け、隣国タイから仕入れているとのことであった。ラオスにいる犬では売れないため、扱う犬は外来種のみであった。値段はおよそ 40 ドル～ 150 ドルくらいで売っているとのことであった。さらに Nongnō 村では、犬は大体村内のみで取引され、犬 1 頭につき鶏 2 羽と交換されている。

また、犬泥棒も存在し、可愛い子犬の場合、飼育するために盗まれることもある。さらに、最近では食用として盗まれることもあるという。実際 Nongnō 村に住む女性は、最近飼育目的で子犬を 1 頭盗まれてしまったと話していた。

4］食用としての犬

犬が番犬として飼われている一方で、犬は食用としても利用されていた。犬を食べる人びとはベトナム系の人が多く、それ以外のラオス人はもともと犬を食べる習慣はなかったという。しかしながら最近では、ベトナム系でなくても食べる人もおり、それは主に飲酒をする人に多いとのことであった。市内のある焼き犬料理屋では、焼き犬は一皿 7000 キープで売られていた(写真 5,6)。これはアヒル肉より安く、牛肉より高い値段であるという。この店では一日約 3 匹の犬が調理されていた。また犬は市場では売っていないため近隣の村から調達してくるとのことであった。

あるビエンチャン在住の男性の話によると、犬は黒犬が美味で、寒い時期に食べると体が温まるという。また、黒犬と蛇を混ぜて調理すると滋養がつきよい薬になるという。

3.　今後の調査

以上明らかとなったかかわりから、番犬としての犬は人や人の持つ財産、他の家畜を泥棒から守るという役目を果たしていることが明らかとなった。鶏や牛など犬以外の他の家畜が人間に完全に守られる存在であるのに対し、犬は必ずしも完全に守られる存在ではなく、逆に他の家畜などを守るという点において、犬が人間にとって、他の家畜とは異なるかかわりを持っている特別な存在であることがうかがえる。また、かかわり方は飼い主―番犬といったものだけでなく、時には食用とされることもあることが明らかとなった。

そこで以上の予備調査の結果から、今後の調査のテーマおよびその内容とすべき点として以下の 3 点があげられる。

1）飼い犬に求める役割

犬は主に番犬として飼育されていることが明らかとなったが、犬が守ることを期待されている対象についてはビエンチャン特別市と周辺農村において、また犬を飼育する世帯の生活スタイルや生業によってさまざまであろうことが考えられる。そこでこれらの条件の違いによって犬に求める番犬像がどのように変わってくるのかということを明らかにする。

さらに番犬以外の付加的な飼育目的においてもより詳細な聞き取り調査を行い、人びとが飼い犬にどのような役割を求めているのかという面での人びとの意識を解明する。また、求めていることと現実が異なる可能性も考えられるので、実際の犬の働きはどのようであるかということを明らかにする必要がある。

2）犬取引ネットワーク

番犬としての犬は一般的に金銭を介せずやり取りがなされている。そこでこれらのやり取りがどのような間柄で行なわれているのか、犬取引にまつわる人間関係を明らかにする。また Nongnō 村のように、ある一定の地域内のみで決まった品と交換される場合、それはどのようなものか明らかにする。

また食用としての犬は、予備調査を行なった店では、犬を近隣の村から調達するとのことであったが、その調達先以外に、それは飼い犬なのか、飼い犬の場合、取引に金銭を介するのか、飼い主の承諾はあるのかということを明らかにし、飼い犬、食用犬双方の犬取引に関わる人間関係を明らかにする。なお、予備調査で関わった飼い犬を販売するペットショップ、犬肉を調理し、提供する店の経営者は、ベトナム系であることが多く、聞き取り調査からは、犬の取引に対する意識は民族によっても違うであろうことが推察された。そこでこれらの意識に関して民族による違いも考慮に入れ明らかにする必要があると考える。

3）噛むことと病気に対する意識

予備調査では自分の犬、もしくは自分の住む村で飼育されている犬は噛まないと認識している一方で犬が何かを噛む衝動に駆られるもしくは噛むことによって人間にうつるのではないかと考えられる病気の存在も認識しているという相反する事実が示された。そのため狂犬病をはじめとする犬の病気についての人びとの認識を明らかにし、病気発生時の人びとの犬への対応を調べる。また人びとの「犬は噛まない」という認識はどのように作られているのか、明らかにする。

以上を明らかにすることによって、対象地域において、人と犬のある部分に特化した一元的な関係だけでなく、さまざまな角度から見た犬と人の多様なかかわりが明らかにできるのではないかと考える。

Summary

This pilot survey aims to clarify and consider how humans and dogs create relationships around Vientiane in Laos. After twice survey, following points have been indicated. Dogs are reared for the purpose of guard. People consider that their dogs do not bite. Most of house dogs are traded without money or exchanged for some goods. And some people eat dogs. Therefore I consider further researches are required in following three points. 1] What people demand of house dogs. 2] How people trade dogs and consider about dog trading. 3] How people consider that dog bite people and diseases that dogs have.

写真 1　自由に動き回る犬の様子 1

写真 2　自由に動き回る犬の様子 2

写真 3　つながれて飼育される犬

写真 4　外で寝そべる犬

写真 5　焼き犬屋店内

写真 6　犬料理